

中央アジア初期農耕牧畜民の環境と文化集団

キルギス、天山山脈とウズベキスタン、フェルガナ盆地での最近の発掘調査からの新視点

久米正吾（東京藝術大学）

本発表では、中央アジア東部での「牧畜社会」開始の基盤となった青銅器時代における初期農耕牧畜の波及とその歴史生態学的意義について、キルギス、天山山脈とウズベキスタン、フェルガナ盆地での発掘調査成果に基づき議論する。山岳地帯と平地という異なる地理環境への農耕牧畜の適応は、異なる2つの考古学的文化集団がそれぞれ担っているため、両者の相互関係の実相解明に向けた展望についても述べる。

中央アジア東部において、動植物考古学的な証拠に基づく家畜種・栽培種が初めて出現するのは、紀元前3千年紀中頃の前期青銅器時代以降である。この食糧生産経済への移行は、地理的環境により異なる考古学的文化集団によって担われた。すなわち、天山山脈の山岳地帯への農耕牧畜の波及は、南ウラルのステップ地帯からアルタイ山脈まで広がるアンドロノヴォ（Andronovo）文化の広域拡散と明らかに密接に連動しており、移動民による山岳環境への牧畜的適応や開発によってもたらされたい。一方、フェルガナ盆地での農耕牧畜の導入は、より定住性の高い囲壁集落を営むチュスト（Chust）文化による平地開発をもって開始された。また、チュスト文化の分布範囲はフェルガナ盆地内にとどまり、地域性が極めて高い文化であることもその特色の1つである。この対照的な農耕牧畜の波及プロセスに関する考古記録を収集し、中央アジア東部における食糧生産経済への移行の複雑性をより詳細に論じるために、2016年からキルギス、天山山中のモル・ブラク（Mol Bulak）1遺跡、2018年からはウズベキスタン、フェルガナ盆地のダルヴェルジン（Dalverzin）遺跡の発掘調査を開始した。

モル・ブラク1遺跡は、天山山脈中央部、ナリン川流域左岸の山域内に位置する。ナリン川に流れ込むモル・ブラク沢右岸斜面の山塊上の標高2400m程の地点に、南側に開けた小規模な盆地状地形があり、遺跡はその平坦面を利用して営まれている。遺跡のさらに上方の標高2600m程の地点には、現在も利用されている家畜の放牧地が展開しており、モル・ブラク1遺跡は夏季に移牧を実施するための季節的野営地として利用されたとみられる。試掘調査を実施し、採集炭化物標本等の年代測定を実施した結果、少なくとも紀元前2千年紀初頭から紀元後1千年紀中頃までの約2400年間の連続した文化層を有することが判明した。試掘トレンチの最下層からはさらに炉跡が確認され、この野営地の利用年代がさらに遡ることは確実である。採集した動植物標本の分析結果は、少なくとも紀元前2千

年紀中頃から、コムギやヤギ／ヒツジ、ウシ、ウマの栽培植物と家畜が利用されていることを示している。一方、それ以前の文化層からは考古記録の痕跡が極めて希薄で、紀元前2千年紀中頃以降にモル・ブラク1遺跡の野営地としての利用が本格化したことが示唆される。発掘調査は実施していないが、モル・ブラク1遺跡周辺にはテントないし家屋の基礎石列、墓などが多数点在しており、これらの遺構の発掘調査を進めることによって、遺跡の構造がより詳細に判明するものと思われる。

ダルヴェルジン遺跡は、フェルガナ盆地のカラ・ダリヤ川左岸に位置する。遺跡のサイズは25haを超え、チュスト文化を代表する遺跡である。1950年代以降、断続的ではあるが大規模な発掘調査が続けられ、磨石類や石製農具など定住的な農耕村落の性格を裏付ける豊富な考古遺物が出土している。これまで公表された出土標本の散発的な炭素年代測定は、紀元前2千年紀中頃から紀元前1千年紀初頭に遺跡が営まれたことを示しているが、詳細な層位記録とそれに基づく遺跡編年の構築や出土標本分析の試みはなされていない。このため、同遺跡の文化層を詳細に記録するための試掘調査を2018年に実施した。出土標本の分析は進行中であるが、今後はより詳細な時間軸に基づいて出土遺物や遺構の評価を実施していくことが可能となる。

以上の最近の発掘調査成果を踏まえると、中央アジア東部の初期農耕牧畜は、山岳地帯と平地という異なる地理環境で文化的には変異するものの、その導入タイミングはほぼ同時期とみなして良いことがわかってきた。本発表では、その導入のプロセスを個々に論ずるとともに、その変異が生じた背景すなわちアンドロノヴォ文化とチュスト文化の相互関係を予察する。また、両者の相互関係を具体的に記録する考古学的証拠やその分析手法についても議論したい。

キーワード 中央アジア東部、初期農耕牧畜、青銅器時代、アンドロノヴォ文化、チュスト文化